様式第２号

平成２５年度　　独 創 的 研 究 助 成 費 実 績 報 告 書

平成２６年　３月２７日

<table>
<tr><td>申　請　者</td><td>学科名</td><td>保健福祉</td><td>職 名</td><td>准教授</td><td>氏 名</td><td colspan="2">京林由季子　　印</td></tr>
<tr><td>調査研究課題</td><td colspan="7">特別支援教育における新学習指導要領の展開と課題に関する検討
－体育科教育における生徒の困難さの実態と対応－</td></tr>
<tr><td>交付決定額</td><td colspan="7">200（千円）</td></tr>
<tr><td rowspan="3">調査研究組織</td><td colspan="2">氏　　名</td><td colspan="2">所属・職</td><td colspan="2">専門分野</td><td colspan="2">役割分担</td></tr>
<tr><td>代表</td><td>京林　由季子</td><td colspan="2">保健福祉学部</td><td colspan="2">特別支援教育</td><td colspan="2">研究の企画・実施・まとめ</td></tr>
<tr><td>分担者</td><td></td><td colspan="2"></td><td colspan="2"></td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td>調査研究実績の概要</td><td colspan="7">現在学校教育においては、通常学級に在籍し知的発達に遅れはないものの、学習面又は行動面で著しい困難を示す児童生徒は6.5%と推定されている（文科省，2012）。このような現状を踏まえ、平成19年4月から学校教育法に位置づけられた「特別支援教育」がすべての学校において推進されている。
ところで、小学校においては平成23年から、中学校においては平成24年から新学習指導要領が全面実施となったが、特別支援教育に視点をおいた新学習指導要領の展開に関する研究は極めて乏しい。また、実技系教科における特別支援教育の現状に関する実践研究・調査研究は少なくその実態は明らかでない。
新学習指導要領の特色の一つに中学校体育における武道必修化があるが、これは、新学習指導要領により12年間を見通した指導内容の体系化という視点から、武道を含むすべての領域が必修化された。この武道の必修化については、多くの議論や実践上の課題の指摘がなされているが、一方で、対人的運動形態を通して、自己の判断力を養い、相手を尊重する教育課題を担える教材としての資質を有しているとの指摘もある（木原，2011）。
そこで本研究では、特別支援教育における新学習指導要領の展開と課題について、中学校の実技教科である体育、特に武道の必修化に注目し、①中学校の武道授業における実施状況と問題状況、②学習面又は行動面で困難を示す生徒の実態と武道授業における問題状況と対応について、先行研究及び体育教員への面接調査から明らかにすることを目的としている。</td></tr>
</table>

次頁に続く

調査研究実績の概要	（１）中学校武道必修化に関する文献研究 ①中学校における武道必修化の完全実施が平成24年であるため、論文情報ナビゲータ（CiNii）においても、中学校武道必修化に関する論文は44件（平成26年3月1日現在）と少なく、その多くが理念的な内容もしくは武道必修化に向けた提言的内容となっている。 ・論文情報ナビゲータ（CiNii）：武道必修化関連44件（平成26年3月1日現在）／内、障害生徒が含まれるもの2件 ・日本体育学会第64回大会：武道必修化関連3件／内、障害生徒が含まれるもの0件／アダプテッド・スポーツ関連21件の内、学校教育を対象としたもの7件） ・日本武道学会第46回大会：武道必修化関連3件／内、障害生徒が含まれるもの0件） ②岡山県下の武道授業実施状況について、以下の情報を収集・整理した。 ・岡山県下中学校の武道種目別状況 ・武道授業の指導教員の種別（専門家なら段位、専門家でないならば経験等） ・武道の授業形態や時間数 ・中学校の武道場の有無　等 （２）中学校体育教員への面接調査 中学校での武道授業の実施状況や問題状況について事例的に明らかにするために、中学校体育教員2名について半構造化面接を実施した。調査対象者は各々剣道と相撲の専門家の教員である。調査内容は①各校における武道授業の実施状況と問題状況、②武道授業における特別な配慮や支援を必要とする生徒の問題状況と対応である。面接は、対象者の了解を得てボイスレコーダーに記録したものをテキスト化し、データマイニングソフト（KH Coder）を通しカテゴリー化を行い内容を検討した。 結果の概要は以下の様にまとめられる。 ①武道の授業実践上の問題と工夫 ａ　施設の整備（道場の狭さ／設備がない／簡易土俵の管理、等） ｂ　用具の準備（安全な用具（ｶｰﾎﾞﾝ製竹刀など）の確保／鍔等消耗品の費用、等） ｃ　単元計画（ ｄ　技の指導（技の指導は指導者が2名いないと生徒にモデルを示せない、等） ｅ　評価（意欲、関心、態度、健康、安全と全ての評価が大変、等） ②武道授業における特別な配慮や支援の状況と対応 ａ　実態（毎年1クラスに複数の配慮や支援を要する生徒がいるのが当たり前／体育では指導者以外の教員の加配はない、等） ｂ　困難（着装：紐を結ぶことはプリントで見せてもできない生徒が多い、身体接触を嫌がる、こだわりが強い、等） ｃ　対応（生徒同士でペアを組ませ相互学習を利用／剣道部員にモデルになってもらう／ゲーム感覚の指導を取り入れる／異なる指導内容を最初から決めると本人のプライドを傷つける／自尊感情を育む指導を大切にする、等） 武道授業については、限られた施設や用具、授業時間内で多くの初心者である生徒に対して何をどのように指導するのかの検討が始まったばかりであるため、障害による特別な配慮や支援を必要とする生徒を対象とした指導事例は極めて希な現状であった。多様な事例による指導方法の工夫に関する情報の収集が必要と考えられた。特別な配慮や支援を必要とする生徒の状況は個々に異なるものの、事例の積み上げによる指導方法の工夫を慎重に応用することで新たな事例に対応できるとともに、障害生徒のみでなく、初心者の多い中学校武道授業の実践にも活かされると考えられる。

成果資料目録	日本体育学会第65回大会（H26年8月）での発表を計画している。 学内開放での発表を予定している。